

『陽のあたる場所』 宗教2世の悲劇

志村 良知

板の間の陽溜りを慕う子猫の可愛い動画を見て『陽のあたる場所』という映画を思い出した。私はこの映画を高校時代に洋画三本立館の「甲府シネマ」で見た。画面もストーリーもとにかく暗い映画という印象しかなかったが、エリザベス・テラーの美しさは特別だった。

どんな映画だったかと、改めて見てみた。日本公開は一九五二年、主演はモンゴメリー・クリフト。当時のハリウッドを代表する色男である。

主人公ジョージは上流の一族に生まれながら早くに父を亡くし、母子家庭に育つ。ある理由で教育も受けず、ホテルのベルボーイをしているところを一族の長で富豪の伯父に拾われ、伯父の工場で働き始める。控えめながら優秀な青年で、伯父に気に入られる。一方で職場の同僚のアリスという娘に言い寄られ恋仲になる。

ある日、伯父の屋敷のパーティーで社交界の名花アンジェラに会う。演ずるは撮影当時七歳のエリザベス・テラー。光り輝き、夜会服の腰の細いこと、さらに水着姿。二人はお互いに惹かれ、アンジェラの方が熱を上げていき、周囲もそれを認める方向へ。伯父は昇進を約束する。ここで障害はアリス。妊娠し、ジョージに強く執着する。

アリスとどこか知らない町の片隅か、アンジェラがいる『陽のあたる場所』か、で苦悩するジョージ。モンゴメリー・クリフトの演技が凄い。結局アリスを選ぶが、ボートの転覆事故で死なせてしまい、殺人罪で死刑判決を受ける。

ジョージはなぜ教育を受けられなかったか。彼の母は、宗教活動が全てで息子の養育は二の次という、あるキリスト教宗派の熱烈な伝道者だったのだ。最後に収監中のジョージの前にこの母が現われ、アリスの死を一瞬でも望んだのなら、その心の罪が死刑に値すると主張し、弁護士と教誨師もろとも説伏してしまう。

やはり暗い映画だった。この映画の原作は一九二〇年代の小説だという、親の宗教観が子供の人生を決めるといふ宗教2世問題の根との深さと広がりには驚く。